

『海辺のある出来事』

小川 雅 魚

言語は人間にとって自己を含む世界の事象を把握し理解するための最大の道具である。言語がなければ私たちは、それこそ言語に絶する困難な生を生き抜かねばならなくなるだろう。しかしこの道具を従順な僕と考え、あだやおろそかに扱うと、手酷いしつべ返しをくうこともある。

「不思議の国」で兎穴におちたアリスは、テーブルの上に「私を・飲め」と書かれた小瓶をみつけ、その内容物を飲みほす。すると身体が望遠鏡のように縮みだし、鼠ほどの大きさになって、自分が流した涙の海であやうく溺れそうになる。軽率といえは軽率。しかし彼女の軽率を、私たちは笑うことはできない。

もう三十年以上も前の話である。

四十すぎの中間管理職サラリーマンが子供にせがまれ、真夏の海水浴場にやってきた。水着には着がえたものの仕事上の難題が念頭をさらず、パラソルの下に浮かぬ顔で寝そべったまま沖の方を見つめ、いつまでも動こうとしない。

どれほどの時間がたっただろう。彼はふと水辺から数十メートルのところへ跳び込み台を見つけた。物体としてはすでに視界に入っ

ていたのだが、いまそれが「跳び込み台」として意識にのぼったのである。彼はちよつと跳んでみたくなった。

潮は大分ひいていて、泳ぐまでもなく、遠浅で膝までしかない海水を押しわけつつ、歩いてそこまでいった。三メートルほどの高さをよじ登り、櫓の上にすつくと立つと、大きく息を吸い込み、彼は鳥のように跳んだのである。

その頃、私は毎年夏休みになると八百屋の配達のアルバイトをしていて、その日も注文の野菜を売店に届けてこの事件のことを聞いたのだった。浜辺全体にまだ現場の空気があった。男は頸の骨を折って即死であった。そして櫓は跳び込み台ではなく、救助用の監視台として作られたものだったという。

翌年の海開きには、その監視台はすでに撤去されていた。

さて、以下に掲載する四つの論文は、昨年の十二月十三日に本学で開催された第十二回梶山フォーラム、『表現・異文化・コミュニケーション』での口頭発表に基づいている。予想されたことではあったが、ひとり三十分の持ち時間はいかにも短く、四氏とも話がこれか

ら佳境に入るところで、いきなり終了のゴングを聞かされたといった未練の表情で降壇していた。その後のシンポジウムでも、司会（小川）の不慣れもあつてか、各自の主張を十分に引き出せたとはいいい難い。

それ故、ここに再登場願った次第である。いわばパーティーを中途で打ち切れメインディッシュを供せなかつた料理人たちが、同じ材料で作直した、これは再現メニューである。なかには料理法を変えたシェフもあるようだが、ともかく、生もの（制限時間）は入っていないので、いつでも、また繰り返し、賞味することができ

る。
どうぞごゆっくり味読してください。